

学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 村 山 陽 君

論文題目 現代社会における高齢者と子どもの関係の再構築
— 高齢者世代と子ども世代の世代間交流を契機とした
地域コミュニティの再生 —

審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員
教育学修士 渡辺 秀樹

副査 慶應義塾大学法学部教授・社会学研究科委員
博士（社会学） 有末 賢

副査 慶應義塾大学名誉教授・元社会学研究科委員
文学博士 三井 宏隆

副査 立教女学院短期大学特任教授・慶應義塾大学名誉教授・元社会学研究科委員
文学博士 萩原 滋

1、本論文の構成

本研究の目的は、現代の日本社会における地域の高齢者と子どもの世代間交流の実態を明らかにした上で、質的調査および量的調査により現実に即した世代間交流モデルを構築して検証することである。具体的に、各地で実施されている世代間交流事業に焦点をあて、① 世代間交流を規定する「多世代ネットワーク」、② 世代間交流効果として高齢者の「生涯発達」および子どもの「社会性の発達」、③ 世代間交流効果の媒介要因としての当事者の「認知過程」および「情意過程」という要因を組み入れ、それら諸要因相互の関連を解明することを目的としている。

目次構成は、以下の通りである。

序章. 研究の目的と意義

I. 研究の目的

II. 研究の構成

Ⅲ. 研究の意義

第1章. 世代間交流研究の現状と課題

- I. 世代間交流とは何か
- II. 学問としての世代間交流学の確立
- III. 世代間交流に関する諸理論
 - (1) 個人の発達に焦点をあてた理論
 - (2) 対人接触に焦点をあてた理論
 - (3) 集団葛藤に焦点をあてた理論
 - (4) ネットワークに焦点をあてた理論

第2章. 世代間交流の社会的表象と実態

- I. 世代間交流事業に関する新聞記事分析
- II. 世代間交流事業主催者に対する質問紙調査
- III. 従来の世代間交流モデルの再考

第3章. 児童と高齢者の世代間交流モデルの作成

- I. 児童を対象とした世代間交流に関する質問紙調査
- II. 高齢者を対象とした世代間交流に関する質問紙調査
- III. 新たな世代間交流モデルの作成

第4章. 世代間交流の媒介モデルの検証

- I. A市とB市における世代間交流事業のフィールド調査
- II. 都内C区の児童高齢者施設Xでの観察調査
- III. フィールド・スタディとしての「りぷりんと」プロジェクト
 - 研究1-1. 世代間交流行動尺度 ECIA の作成
 - 研究1-2. 日本版世代間交流行動尺度およびインタビュー調査による世代間コミュニケーションの検証
 - 研究2-1. 交流授業が児童の発達に及ぼす影響
 - 研究2-2. 中学入学後の効果検証
 - 研究3. 高齢者の発達に及ぼす影響
- IV. モデルの検証結果の考察

第5章. 今後の世代間交流への提言

- I. 学問としての世代間交流学の可能性
- II. アクションリサーチとしての世代間交流学
- III. 高齢者と児童をつなぐ「仕掛け人」(コーディネーター)
- IV. 児童が主体となる世代間交流

結論: 世代間交流モデルの精緻化

謝辞

付属資料

文献

2、本論文の概要

まず、第1章において、世代間交流学の確立に向けて、これまでの研究史および関連諸研究を整理し、それが踏まえるべき論点を提示したうえで、以下にあげる3つの研究が展開される。すなわち、研究1. 現代日本社会における世代間交流事業の把握(第2章)、研究2. 新たな世代間交流モデルの作成(第3章)、研究3. 新たな世代間交流モデルの検証(第4章)、である。各研究の概要は以下の通りとなる。

研究1. 現代日本社会における世代間交流事業の把握

地域における世代間交流事業の実態を把握するために新聞記事の内容分析および世代間交流事業主催者に対する質問紙調査を実施している。90年代後半から世代間交流事業の記事数が増えて行くこと、記事内容が、年代によって変化していることが明らかにされる。すなわち、「世代間交流事業」に対する社会的関心は、「社会福祉」や「学校教育」の政策と連動して高まっていることが示される。事業主催者68事例に対する質問紙調査においては、短期・不定期型の事業が多いことを明らかにした上で、「世代間ギャップの問題」、「運営の問題」、「交流プログラムの問題」、「参加者確保の問題」など、現場では多様な課題を抱えていることを示している。

研究2. 新たな世代間交流モデルの作成

従来の世代間交流モデル(ベースモデル)と新たな世代間交流モデル(媒介モデル)の比較検討を行うために、千葉県B市内の児童と高齢者を対象にした大規模な質問紙調査を実施している。まず、児童調査は、B市内14校中8校の小学5、6年生を対象に行っている(回収数;974)。主な項目は、「交流の度合い」、「高齢者イメージ」、「多世代ネ

ネットワーク」、「共感性」、「地域活動参加意識」である。この分析から認知過程と情意過程を取り込んだ媒介モデルが提示される。高齢者を対象とする調査は、同じく B 市内の公民館の利用者（65 歳以上）に対して実施された（回収数；246）。「交流の度合い」、「子どもイメージ」、「多世代ネットワーク」、「世代継承性」、「地域活動参加意識」が主な項目である。この分析でも同じく、媒介モデルが提示される。

研究 3. 新たな世代間交流モデルの検証

次に、研究 2 で作成された新たな世代間交流モデル(媒介モデル)を検証するとともに、さらに精緻化するために、質的調査および量的調査をおこなっている。質的調査として、群馬県 A 市および千葉県 B 市の世代間交流事業の関係者(シニアボランティア、教員、行政職員)を対象に、インタビュー調査を実施している。その結果、世代間交流事業が持続している地域では、幅広いネットワークを持つ人物が、行政・学校・地域高齢者をつなげるコーディネーターとしての役割を担っていることを見出している。さらに、東京 C 区の世代間交流施設 X において観察調査を実施し、空間と時間を共有していても、それだけでは高齢者と児童との世代間交流は生じず、コーディネーターとして施設スタッフが介入することで、高齢者と子どもとの交流が成立する過程を見出している。

次いで、シニアの絵本読み聞かせボランティア「りぷりんと」プロジェクトについてフィールド・スタディを行っている。具体的に、① 川崎市の A 小学校で実施されている交流授業を対象に、世代間交流の会話・行動分析を行っている。分析にあたり、Newman et al. (1999) の世代間交流観察尺度 (ECIA) を改良して独自の尺度を作成し、それをもとにシニアボランティアと児童の会話と行動の変化を検討している。継続的な交流を通して、シニアボランティアと児童の世代間コミュニケーションが成立・進展するプロセスを観察している（ビデオデータの分析；顔の表情の変化／顔の向きの変化／発言率の変化）。② 同じく、川崎市の A 小学校の交流授業に参加する児童を対象に質問紙調査を 3 回に亘り実施し、その効果を検討している。社会性の発達(共感性、地域活動参加意識)を従属変数、期間(交流授業前、交流授業後)と介入の有無(介入群、待機群)を独立変数とし、情意過程(親密な対人関係、交流内容への関心)との関連性を検討している。その結果、交流授業前と後では参加意識が変化し、その媒介要因としてシニアボランティアに対する親密感と交流内容への関心(情意過程)があることを示している。この短期効果の検討に続き、長期効果の検討のため、③ 交流授業における世代間交流効果が中学入学後に維持されるかを検証する目的で、川崎市立 A 小学校の卒業生が通う同市立 B 中学校の 1 年生を対象とする調査をおこなっている。B 中学校の校区内には 3 校の小学校があるが、その中で「りぷりんと」が学校ボランティアとして活動しているのは A 小学校

のみである。よって、A 小学校出身者を「交流体験あり群」、その他の小学校出身者を「交流体験なし群」として長期的効果の検証を行う、としている。分析には、交流授業体験を独立変数、情意過程(対人関係の親密さ、交流内容への関心)および認知過程(高齢者イメージ)を媒介変数、地域活動参加意識を従属変数とするパス解析を行って、情意過程やイメージを考慮すべきことが示される。

④高齢者への効果を分析するため、村山君の参加している、東京都健康長寿医療センター研究所「社会参加と地域保健研究チーム」(代表 藤原佳典)の調査データを分析している。2004 年度よりシニア読み聞かせボランティア“りぷりんと”を対象にしてランダム化統制群事前事後テストデザインによる介入研究を行っており、本研究では世代継承性と類似した概念であるストレス処理能力(SOC: sense of coherence)の下位概念である「有意味感」の縦断的变化に注目して分析する。その結果、継続的な世代間交流事業への参加が高齢者ボランティアの世代継承性の向上に寄与する可能性が示唆される。

第5章では、以上の研究結果をもとに、現代日本社会における世代間交流事業の課題を明らかにするとともにその解決策を提示し、世代間交流学の可能性を提起している。

3、本論文の評価

本論文は、世代間交流事業に対する社会的関心の推移を明らかにするための新聞記事の内容分析、世代間交流事業の実態を把握するための事業者に対する質問紙調査、児童と高齢者の双方にとっての世代間交流の効果に関する媒介モデルの策定、そのモデルを検証するための児童及び高齢者を対象とした質問紙調査、首都圏の2つの都市で実施されている世代間交流事業の参加者へのインタビュー、都内の児童高齢者交流施設での参与観察、高齢者による絵本の読み聞かせ活動事業(りぷりんと)の行動観察並びに質問紙による効果測定など、村山君が取り上げた研究対象は広範囲に及んでおり、インタビューや参与観察など質的なものから質問紙調査結果の多変量解析まで分析手法も多岐にわたっている。

世代間交流事業の実施には、高齢者と子どもだけでなく、その間をつなぐ多世代ネットワークの構築が重要という認識に基づき、異世代に対する認知(高齢者イメージ、子どもイメージ)を媒介要因として、高齢者にとっては「世代継承性」、子どもにとっては「社会性」の発達をもたらされるという「世代間交流モデル」を村山君は提唱し、それを裏付ける調査結果を報告している。調査対象が広範囲に及ぶ包括的な研究であり、学際的な世代間交流学の構築を目指す意欲に満ちた研究である。本論文で報告された多種多様な研究の相互の結びつきをより体系化するさらなる作業が必要であり、実践的関

心と学術的関心の融合の試みは今後の課題でもあるが、多様な手法を駆使して未開拓な分野に挑戦した力量を評価したい。

他にも評価しうる点としては、以下が挙げられる。第一に世代間交流研究の先行研究の欠点を踏まえて、新たな世代間交流モデル（媒介モデル）を積極的に構築して、提示していること、である。第二には、社会心理学、社会学の理論と仮説においても、（１）ネットワーク論、（２）発達論、（３）対人関係論のそれぞれの先行研究を子細に検討して、より適切なモデルを目指しており、実証研究として理論や方法論に寄与している論文である点が指摘できる。第三に、量的調査（内容分析、質問紙調査）、質的調査（インタビュー調査、観察、参与観察など）、アクションリサーチなど調査方法としても様々な調査法を駆使し、フィールドとしての「世代間交流事業」を描き出した業績は高く評価できる。第四に、尺度の改良やデータの解析、分析結果、結論の導出など論理的にも無理がなく、理解しやすい論文になっていることも指摘できよう。さらに第五に、政策（行政）提言や実践的課題に対しても目配りされた、新たな世代間交流事業のモデルとなる政策提言型の研究でもあることである。

このように多くの評価すべき点があるが、今後の課題として以下の諸点も指摘できよう。第一に、世代間交流研究や世代間交流学の学問的枠組みが「老年学 (Gerontology)」だとすると、最近の高齢者研究や radical aging の研究動向やアプローチからも見る必要があったのではないだろうか。例えば、世代間ギャップや交流における「経験」の問題や多文化主義、ジェンダー問題などの視点である。第二には、社会学的には、地域の特性や居住環境と世代間交流は、密接に関係しているように思われる。「伝統のお祭り」などの地域密着行事を持っているところと、公民館や学校などの近代行政型の居住地域と、農山村、漁村などの過疎地域では自ずと「世代間交流」にも違いがある。群馬県 A 市、千葉県 B 市、東京都 C 区、川崎市 A 小学校では、「近代行政型」の居住地域と言う意味では同種で、東北地方の東日本大震災被災地区とか沖縄とか中国地方の「限界集落」とか、「世代間交流」の意味が異なってくる地域で比較すると、また異なった様相が出てくるかもしれない、という点である。第三に、家族社会学の三世同居家族の研究や「子育て」支援などの社会的アプローチを取り入れる可能性の追求である。例えば、「子育て」支援における近隣の高齢者活動や、シルバー人材などの動き、介護ヘルパーにおける世代間交流の経験など、いわゆる行政の「世代間交流事業」にはなっていないけれども実質的に世代間交流「経験」になっているものは数多くある。そうした「意図しない」世代間交流モデルの方が「媒介モデル」を形成しやすいのではないだろうか。第四に「多世代ネットワーク」の中心となる人物や「コーディネーター」の介在などは、「ネットワーク論」ですでに研究の蓄積がある。移民研究やエスニック・ビジネス、多文化

主義プログラムなどにおいても、コーディネーターや介在する人（キーパーソン）の存在は指摘されている。こうした研究も、「世代研究」の先行研究に入れて、世代間交流モデルを構築する必要があると思われる。

「世代間交流学」という新しい領域への挑戦は、こうした多くの課題を有するが、本論文で示された村山君の広範囲に及ぶ分析の力量は、高く評価できるものである。

4、審査結果

以上より、審査委員一同は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。